

文化的景観としての養蚕農家とその保存活用政策

－前橋市総社町山王地区を中心に－

戸 所 隆

Conserving Silk-raising Farm Houses as a Cultural Landscape
and
Utilizing Them as Regional Resources
－A Case Study in San-no-chiku, Soja-machi, Maebashi－

Takashi TODOKORO

Summary

A number of old and large farm houses, formerly used for silk-raising in San-no-chiku, Soja-machi, Maebashi, should be conserved and utilized as regional resources. Those large silk-raising farm houses with windbreak trees can be categorized as one of the sericultural industrial heritages that sustained Japanese economy from the Meiji era through the early Showa era. Not only the residents but also the community as a whole in San-no-chiku have been very eager to conserve their farm houses as cultural assets. The fact that maintaining those large silk-raising farm houses with windbreak trees has been laborious and costly, however, makes it uncertain for those precious regional cultural heritages to be conserved in future. Some measures should be taken to make it possible to conserve them by making the most of them as regional resources.

The following is a brief description of the proposed measures to be taken.

1. To be designated as a culturally significant landscape by the government.
2. To develop several visitor-friendly routs connecting those farm houses with neighboring historic and cultural sites such as Kokubunji-ato, Soja-jinja Shrine, Soja-kohungun ancient burial mounds, Soja-joshi former site of Soja castle, Soja Museum of Historical Materials and Gunma Prefectural Sericulture Research Center.
3. To develop new local businesses that serve visitors from outside the area with comfortable environments and bring wealth to the local community at the same time. Those new businesses not only can support the local economy but also add new cultural landscapes to the area, which contributes to sustainable local development.

1. はじめに

人間はこの世に生を受けた限り、望むと望まないとに係わらず、生まれた地域の自然環境を活かしてたくましく生き続けようと努力する。様々な自然環境の中で展開される人間の営みは、結果として人間と自然による共同作品といえる地域性豊かな景観を創造してきた。それは自然景観と人工景観が織りなす総合的な景観で、一定の空間・自然環境の中において人間活動の時間的変化が重層化されたものである。すなわち、それは地理的空間における人間活動の歴史的な積み重ねとしての地域文化の具象といえる。その結果、人間が生存する地域すべてにこうした景観が創造される。ただし、個々の景観が他者に訴える力には、強弱が存在する。

ところで、文化財保護法の第2条には「文化的景観」と云う用語がある。そして「文化的景観」を「地域における人々の生活又は生業及び当該風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のために欠くことのできないもの」と定義している。この定義によれば、文化的景観は決して従来型の名勝地・景勝地だけを指すのではなく、上述のどこにでもある人間と自然による共同作品としての地域性豊かな景観を意味していると解釈できる。

そうした景観を文化的景観として保護する動きが20世紀末から強くなっている。ユネスコの世界遺産の理念も人間と自然が織りなす生活文化を基礎とした文化景観を、人類の遺産として保護していこうとするものである。かかる視点から身近な地域を見渡した時、地域には様々な文化的景観があることに気づく。そして地域政策学の視点から見ると、文化的景観は地域の活性化を促す資源であり、それを核にコミュニティの再生も図れると考えられる。

ここで取り上げる前橋市総社町の山王地区は、都市近郊にある何の変哲もない農村である。地域住民も特別な集落とは思っていない。しかし、「文化的景観」の視点で見ると、山王地区が従来とは異なって見えてくる。すなわち、延べ床面積500㎡前後の大規模な農家が数十棟並ぶ。その過半数の屋根の上には、「越屋根」といわれる小窓のついた換気口としての小さな屋根が付く。また、農家の屋敷の周囲は、北と西を中心に「桎ぐね」といわれる高さ10m前後の立派な防風林が植栽されている（写真1・写真2）。



写真1 桎ぐねを持つ越屋根付き養蚕農家建物



写真2 門構えの大型養蚕農家建物

山王地区の防風林を持つ大規模養蚕農家群は、明治から昭和前期までの日本経済を支えた蚕糸業の産業遺産の一つである。横浜の経済的基盤は群馬県人がつくった。また明治以降、群馬県からは富士重工業(旧中島飛行機)をはじめ多くの先進的企業が生まれ、工業化社会の構築に先導的な役割を果たしてきた。それを可能にした技術的・資本的・精神的基盤として、蚕糸業の存在は大きい。そうした文化的景観を代表するものとして、群馬県には旧官営富岡製糸場があり、その世界遺産への登録が課題となっている。

世界遺産への登録には、養蚕農家による繭生産、繭を原料とする製糸業で生糸生産、生糸から絹織物生産と続く一連の生産工程が、全体として文化景観として重要となる。その視点からも、山王地区の大規模養蚕農家群は貴重である。また、山王地区に隣接する地域において各種文化財を発掘・整備し、それらと大規模養蚕農家群と連携させることで、新たなデジタル産業の育成も可能となろう。

本稿では、貴重な大規模養蚕農家群を持つ前橋市総社町山王地区に関して、文化景観に関する意識調査を行い、その保存活用方策について検討した。また、地域産業を活かした新たな産業形態についても考えてみる。

2. 総社町および山王地区の文化景観と研究方法

1) 総社町の地理的特性

群馬県の中央部、赤城山と榛名山の裾野が接する地域を縫うように利根川は南流する。その右岸、榛名山麓の末端に前橋市総社町は位置し、山王地区はその南西端にある。

総社町は1954(昭和29)年の合併により、前橋市の一部分地域となった。しかし、歴史的には総社藩として独自の領域を構成し、前橋藩とは異質な空間・地域性をもつ。総社町は高燥の地で、その面積も約6km²に過ぎないが、古くから灌漑用水が整備され、豊かな農業地域として経済的に恵まれた地域を形成してきた。また、今日でもそれぞれ人口30万を越す前橋・高崎両都市間にあり、中心市街地にも近接した豊かで利便性の高い地域である。

群馬県中央部は東北日本と西南日本、日本海側と太平洋側を結節する地理的条件を備え、古より人的にも物的にも他地域との交流が盛んな地域である。中でも総社町とその周辺地域は、7～8世紀における東国文化の中心地域であった。総社町には国史跡の二子山古墳・宝塔山古墳をはじめ、蛇穴山古墳・愛宕山古墳・王山古墳などからなる総社古墳群や山王廃寺などがある。また、総社町に南接する前橋市元総社地区には、律令時代の大国・上野国の国府が置かれ、西隣の高崎市国府地区には国分寺が設置され、総社町一帯には今日まで多くの古代の史跡・文化財が残存する(図1)。

近世初期になると総社町には秋元長朝によって総社城が築かれ、佐渡奉行街道の通る城下町として発達した。秋元家には老中として幕閣で活躍した藩主も多く、総社を治めた後は都留・川越・山形藩主などを勤め、館林藩主として幕末を迎えている。このように秋元家は各地を転封したが、歴代の墓は菩提寺である総社町の光巖寺にあり、総社町の歴史的な中心性は相当高かったといえる。

また、総社町は経済的に豊かな地域として形成された。その要因の一つは、古墳群や国府、国分寺の立地する古代文化の中心地・交通の要衝としての地理的位置である。また、赤城・榛



図1 総社町の歴史・文化景観（前橋市発行1/10,000都市計画図を基に戸所隆作成）

名両火山のローム層からなる畑地を、江戸時代初期に灌漑用水の開削によって水田に変えたことが大きい。すなわち、総社の民は領主秋元長朝と一体となって天狗岩用水を開削し、総社の地を水田地域へと転換させ、豊かな経済基盤を構築した。その様子は、光厳寺境内に残る「百姓等之を建つ」と農民が領主の徳を称えて建立した「力田遺愛碑」（群馬県史跡指定）からうかがい知れる。一般的に領主の重税に苦しむ農民が多い時代におけるこの碑の意味は大きい。¹⁾

稲作と共に藩政期からこの地域の経済を豊かにしたのが蚕糸業であった。総社町に隣接する前橋藩でも土族授産に製糸業が用いられ、日本最初の器械製糸場を幕末に開設している。また、明治初年には群馬県内に官営の富岡製糸場・新町紡績所が操業を始めた。明治27年に群馬県初、日本で5番目の水力発電所が総社町の天狗岩用水に建設された。これは総社町民の資本によるもので、地域経済の豊かさを示すものといえよう。

群馬県の製糸業は、信州のように大資本家による経営は少なく、地場資本経営や農民の出資金による組合製糸が多く、いわゆる女工哀史的状况は少なかったといえる。すなわち、総社町を中心とする地域でも、製糸組合・群馬社が大規模な製糸工場を元総社に建設している。また、利根川を挟む対岸の前橋市岩神地区には国立の蚕業試験場が設置され、総社町山王地区にも県立蚕業試験場が開設された。県立蚕業試験場からは優秀な養蚕技術指導者や桑の品種改良技術者が数多く排出された。また、「群馬式簡易稚蚕共同飼育法」を考案し全国的に大きな影響を与えてきた。²⁾

明治初年までの農業中心時代における総社町は、他の地域に先駆けて灌漑用水整備や土地改良などを進め、経済基盤を造ってきた。また、明治以降における工業社会構築の初期段階では、農業と工業を一体化させた蚕糸業が地域発展の基盤づくりに大きく役立った。すなわち、土地条件の良い水田では米を作り、条件の悪い畑地で桑を栽培し、養蚕を行った。養蚕によって生産された繭は、業者に販売される共に、製糸組合にも参加している。また、農家でも座繰りで生糸が作られ、機織りもされた。こうしてこの地域では、農民を含む市民各層に工業社会構築への基盤づくりが浸透していった。

その後も総社町における工業社会の基盤づくりは、上越線の開通や幹線道路の整備により順調に進展した。その結果、製糸機械技術からロクロが発達し、様々な木製玩具製造が始まり、第二次世界大戦後には全国一の創作こけしの産地に発展した。また、昭和29年の前橋市との合併を機に、日本の高度経済成長を支えるかのように総社町には工業団地や問屋団地が造成され、多くの工場や卸売会社が立地している。

昭和30年～40年代に構築された総社町における近代工業社会は、平成にはいと大きく転換し始めた。工業活動は、単なるものづくりから研究開発型・知識集約型に変わりつつある。たとえば、ボトリング中心のペプシコーラはキリンビールの医薬開発研究所へ、ビクター前橋工場は同社のオーディオ開発の拠点工場へ転換、中小家具工場の集積地は大規模な印刷工場や大手警備保障会社の支社や本社へと変わった。また、問屋団地の諸施設も物流中心機能から情報拠点としての管理中枢機能に重心が移っている。同時に、県立蚕業試験場も、バイオ関連研究を行うようになってきた(写真3)。

今日の総社町には多くの歴史的文化的景観が重層化している。しかし、貴重な歴史的文化的景観が農業社会から工業社会へ、工業社会から知識情報化社会へと転換する中で、急速に失われつつある。総社町の発展基盤となった蚕糸業関連の文化的景観もその例に漏れない。そうした中で、総社町山王地区には養蚕はほとんど行



写真3 都市化の迫る山王地区(群馬県庁を望む)

われなくなったものの、良好な状態で大型養蚕農家が多数存在し、往時が忍ばれる。それだけに、山王地区の大型養蚕農家群を文化景観として維持保全することが課題となる。

2) 養蚕集落景観を維持する山王地区とその要因

総社町山王地区は、総社町の南西部に位置する古くからの農村集落である。しかし、景観的には農村集落だが専業農家は少なく、約300m四方の美しい農村・山王集落が都市化地域に島のように存在する。すなわち、山王集落に隣接して新興住宅地区が形成され、山王集落の東200mには前橋の西部環状道路にあたる4車線幹線道路がある。その沿線は商業業務地区となっており、群馬県最大の警察署である前橋警察署とも直線距離にして300mしかない。また、西約500mには関越自動車道が南北に走り、山王集落の1km圏には上野国国分寺跡も存在する。さらに、山王集落の北約200mには県立蚕業試験場の研究棟等や研究農場が展開する。

ところで本稿でいう山王地区は、「養蚕農家地区」である山王集落、大屋敷集落と旧集落周辺の新興住宅地からなる「周辺住宅地区」を指す。山王地区の市街地は概ね東西600m、南北600mで、その西半分が山王集落、東半分が大屋敷集落・新興住宅地区となっている。山王地区の総戸数は約420戸で、うち養蚕農家地区は約80戸、「周辺住宅地区」は約340戸である⁴⁾。

山王集落には通風を良好にするための越屋根をもつ大規模養蚕農家が16棟存在する。また、これらの養蚕農家の多くは、敷地の北および西にこの地域で「櫛ぐね」と呼ばれる高さ約10mの防風林を有し、独特の景観を作り出している（写真4・写真5）。筆者は群馬県内をはじめ全国各地の養蚕農家群を見てきたが、山王集落ほど大型養蚕農家がコンパクトにまとまって立地し、しかも保存状態の良いところはないと思う（図2）。そのため、2006年4月から11月にかけて、文化庁の技官や地理学・歴史学・建築学関係の有識者を現地に案内し、意見を求めた。その結果、地域住民や自治体など関係機関が伝統的建造物群や文化景観地区としての指定を受けるべく体制づくりをすれば、指定の可能性が高いとの感触を得た。

山王集落が今日まで比較的良好な形で養蚕農家や集落形態・景観を維持してきた要因として、次のことが考えられる。その第一は、古くから豊かな農村集落を構築してきたため、優秀な人材が専業農家として農業を担ってきたことである。第二に、前橋・高崎の都市域に位置するため兼業が行いやすく、養蚕が衰退しても現金収入を得やすい環境にあった。また、第三に分家



写真4 櫛ぐねと大型養蚕農家建物



写真5 越屋根付き大型養蚕農家建築

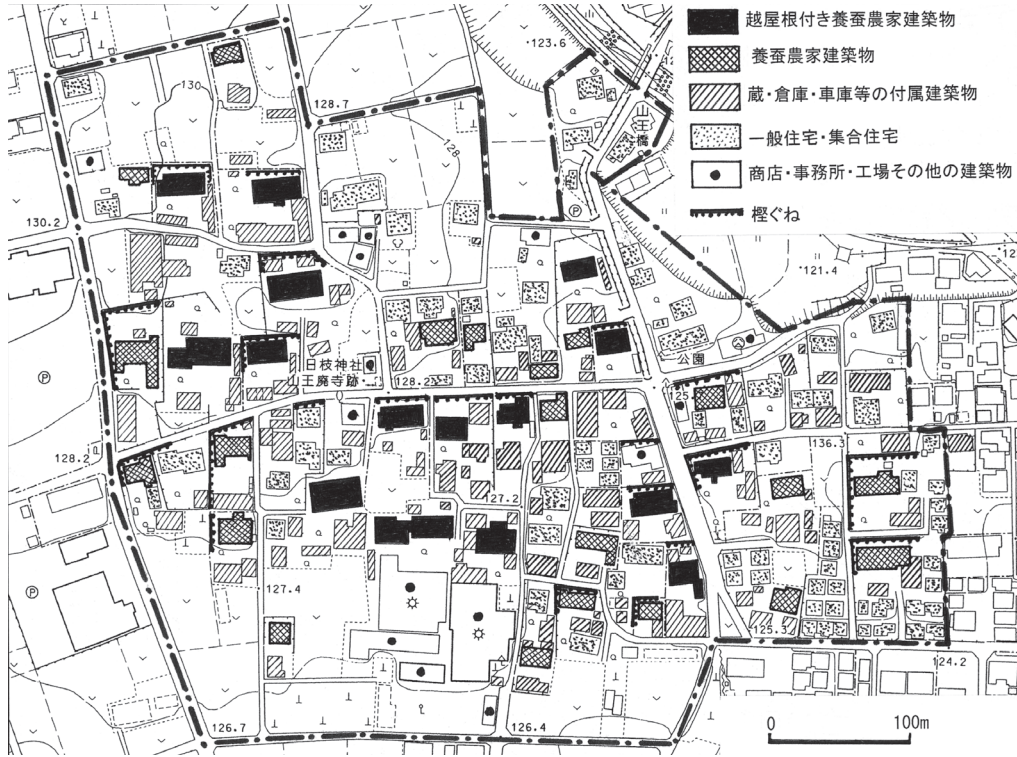


図2 総社町山王地区の大規模養蚕農家建築物の分布

(前橋市発行 1/2,500地図をベースに2006年11~12月高崎経済大学戸所ゼミ調査)

の多くが、敷地を分割するのではなく、山王集落に接した新興住宅地域に展開した。同様のことが、日本有数の養鶏用ヒヨコ生産会社に成長した企業も、本社は大型養蚕農家を活用し、工場や物流施設は集落に近接した集落外に展開している。さらに第四の要因として、大型養蚕農家所有者の経済的な豊かさと教養の高さが、伝統文化や景観維持への理解と広大な屋敷・大型建物故に多額の費用を要する「桧ぐね」や建物・庭の維持管理を可能にしてきたといえよう。

しかし、他方でこの地域の地理的条件は良く、都市化の圧力も強い。農業の担い手も減少し、家族構成も縮小している。社会経済状況が大きく変化してきており、個人の努力で広大な屋敷を維持管理することは困難になりつつある。効果的な対策を講じない限り、大型養蚕農家群の維持は難しく、近い将来急速に現代的建築物に建て替えられるであろう。現在はその瀬戸際にあるといえる(写真3参照)。

3) 調査研究方法

山王地区における大型養蚕農家群を将来にわたり維持保全するには、何らかの形で公的な支援を受ける必要がある。そのためには、大型養蚕農家群を伝統的建造物群保存地区や文化景観地区などへの指定に関する意向調査が必要となる。そこで、地域住民の意向調査を行うべく、2006年9月から高崎経済大学地域政策学部戸所ゼミ3年生と共にアンケート調査設計に入った。

アンケートは山王地区を前述の二区分、すなわち大型養蚕農家の集積する西半分を「養蚕農

家地区（山王集落）」と東半分の「周辺住宅地区（大屋敷集落・新興住宅地）」を対象とした2種類の調査票を作成した。

アンケート調査は戸所ゼミ3年生12名が調査対象地区を分割分担する形で、2006年11月21日～12月10日を調査期間として地区内全戸を対象に訪問面接方式で実施した。その結果、「養蚕農家地区」では世帯数の約50%にあたる41の有効回答数を、「周辺住宅地区」で340戸中61戸（約18%）の有効回答を得ることができた。なお、訪問面接方式で調査を実施したため、アンケート調査項目以外にも様々な情報が得られた。

調査に際しては地域の自治会長その他の積極的な協力で、回覧板等による調査広報が行われた。この有効回答数は調査期間内に複数回訪問しても留守の場合や調査拒否された世帯以外の全世帯である。周辺住宅地区には集合アパートも多く、協力を得るのが難しかった。従って、今回の調査方法においては、これ以上の有効回答数は得られない数字であり、結果として全戸の回答ではないが、地域の意見を反映したものと考えている。

3. 総社町や山王地区の歴史性や文化景観に関する認知度と関心度

1) アンケート回答者の特性

養蚕農家地区では、建物形態から越屋根付き養蚕農家8戸、一般農家8戸、一般住宅25戸の41戸から回答が得られた。また周辺住宅地区では、越屋根付き養蚕農家4戸、一般農家2戸、一般住宅・その他55戸の61戸から回答を得ている。すなわち回答世帯で見ると農家比率は養蚕農家地区で39%、周辺住宅地区で10%である（表1）。

回答世帯の年齢構成は全体に高齢である。すなわち、山王集落では60歳以上が42%を占め、20歳未満は14%にすぎない。周辺住宅地区も60歳以上が30%と高いものの、養蚕農家地区ほどではなく、20歳未満も19%である。大型養蚕農家での高齢化が進んでおり、その面からの維持保全が難しくなる可能性も高い。

また、回答者の職業を見ても、高齢化や都市化を反映して養蚕農家地区でも主夫・主婦と無職が56%と多く、農業従事者は20%、会社員5%にすぎない。ただし、周辺住宅地区の農業従事者5%、会社員26%、主夫・主婦と無職の44%に比べると養蚕農家地区での農業従事者比率は高いといえる。

周辺住宅地区における回答者の居住歴は、30年以上、16～30年、15年未満にほぼ等分される。詳細に見ると、一番多いのは41年以上の26%、次いで21～31年が23%、5年未満が16%、11～15年が15%と続く。周辺住宅地区は旧集落の大屋敷集落と新興住宅地からなるため、バランス良い居住歴構成となるのであろう。

表1 回答者が居住する建物の種類（単数回答）

回答項目	養蚕農家地区		周辺住宅地区		合計	
	人	%	人	%	人	%
1 越屋根付養蚕農家	8	19.5	4	6.6	12	11.8
2 一般農家	8	19.5	2	3.3	10	9.8
3 一般住宅	25	61.0	42	68.9	67	65.7
4 その他	0	0.0	13	21.3	13	12.7
5 NA・無効	0	0.0	0	0.0	0	0.0
回答総数	41	100.0	61	100.0	102	100.0

(2006年11月～12月 高崎経済大学戸所ゼミ調査)

2) 山王地区における文化的景観への関心度と評価

居住地の文化的景観に対する地域住民の関心度やそれをどの様に評価しているかは、文化的景観の維持保全方向に大きな影響をもたらす。そこで、山王地区の防風林を持つ大型養蚕農家群は、日本で最もすばらしい養蚕農家群の一つと考えられるが、居住者が山王地区の農村景観や山王廃寺跡などの歴史文化財をどの様に見ているか尋ねた。

その結果は、すばらしい景観なので大切に残したいと過半数、56%の人が回答した。特に、養蚕農家地区では回答者の68%、3人に2人までが防風林を持つ養蚕農家群などに強い関心を持ち、プラスの評価をしている(表2)。この数字は周辺住宅地区のそれに比べて20ポイントも多い。積極的に評価しない回答者にしても、「価値ある農村景観なら残したい」とする人が、養蚕農家地区で27%、周辺住宅地区では39%になる。この種の回答者は、山王地区の農村文化景観や山王廃寺跡などの歴史文化財に関する広報活動を的確にすれば関心度・評価を高める人々である。

山王地区全体で見て、上記の「すばらしい景観なので大切に残したい」と「価値ある農村景観なら残したい」を合わせると90%になる。また、広報活動如何で関心度も評価も変わるであろう「分からない」という人も8%いる。そのため、山王地区における防風林を持つ養蚕農家群などの文化的景観の維持保全への関心は極めて高いといえよう。

表2 山王地区の文化的景観や歴史文化財への意識(単数回答)

回答項目	養蚕農家地区		周辺住宅地区		合計	
	人	%	人	%	人	%
1 すばらしい農村景観なので残したい	28	68.3	29	47.5	57	55.9
2 価値ある農村景観なら残したい	11	26.8	24	39.3	35	34.3
3 わからない	1	2.4	7	11.5	8	7.8
4 価値があるとは思わない	0	0.0	1	1.6	1	1.0
5 もっと近代的な集落にしたい	1	2.4	0	0.0	1	1.0
6 古くさい集落	0	0.0	0	0.0	0	0.0
7 その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0
8 NA・無効	0	0.0	0	0.0	0	0.0
回答総数	41	100.0	61	100.0	102	100.0

(2006年11月-12月 高崎経済大学戸所ゼミ調査)

3) 山王地区における養蚕農家・防風林の維持形態と地域の将来像

山王集落の大型養蚕農家群と防風林(桧ぐね)は、かなり良好な状態で今日まで維持されている(写真6)。それは居住者の自己負担とその努力の賜である。これらを将来に渡し、いかに維持保全すべきであろうか。

最も多い意見は、「行政による多少の補助」で回答者の47%を占める。次いで「国の指定による大幅な補助」と「わからない」が共に18%である。また、現状の自己負担のままが良いは12%で、「維持する必要はない」は2%に過ぎ



写真6 桧ぐねが養蚕農家群の北側に連続する景観

ない。すなわち、山王地区の文化的景観の維持保全に対して何らかの形で公的支援を求める人が多数を占める（表3）。

この維持保全方法に関する養蚕農家地区・周辺住宅地区間の意識差は小さい。しかし、養蚕農家地区内でも「越屋根付き大規模養蚕農家」と「その他の建物」居住者では意識に差がある。すなわち、越屋根付き養蚕農家では居住者の自己負担を答える人は皆無で、公的支援を3人に2人にまでが望んでいる。他方で、維持保全する必要はないと回答した唯一1名が越屋根付き農家の人で、わからないとする割合も越屋根付き農家で高い（表3）。このことは、養蚕農家の建物と防風林の価値を認めつつ、当事者としての維持保全の大変さを物語るものである。それだけに放置すれば、近い将来、急速に大型養蚕農家群を核とした山王地区の文化的景観は失われることを予告しているといえよう。

ところで、山王地区居住者はこの地域をどのような街にしたいと考えているのであろうか。それに対する回答で最も多いのは、「養蚕農家景観や文化財を活かした住宅街」で37%である。次いで「現状のままが良い」とする人が32%となる。他は、「近代的な住宅地」、「文化景観を活かした観光の街」、それに「大型店の集積した街」がそれぞれ5%前後あるに過ぎない。このことから居住者の希望は、文化景観を活かした静かな住宅地か現状維持を望んでいる。今日の山王地区における防風林を持つ大型養蚕農家群などの文化的景観に、まさに居住者の気持ちが現れていると考えられる（表4）。

表3 養蚕農家や防風林の維持形態（単数回答）

回答項目	養蚕農家地区					周辺住宅地区				合計	
			一般農家・住宅		越屋根付養蚕農家						
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	
1 現状の各家庭による自己負担	5	12.2	5	15.2	0	0.0	7	11.5	12	11.8	
2 行政による多少の補助	18	43.9	15	45.5	3	37.5	30	49.2	48	47.1	
3 国の指定による大幅な補助	8	19.5	6	18.2	2	25.0	10	16.4	18	17.6	
4 維持する必要はない	1	2.4	0	0.0	1	12.5	1	1.6	2	2.0	
5 わからない	8	19.5	6	18.2	2	25.0	10	16.4	18	17.6	
6 その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.6	1	1.0	
7 NA・無効	1	2.4	1	3.0	0	0.0	2	3.3	3	2.9	
回答総数	41	100.0	33	100.0	8	100.0	61	100.0	102	100.0	

(2006年11月－12月 高崎経済大学戸所ゼミ調査)

表4 山王地区における地域（まち）の将来像（単数回答）

回答項目	養蚕農家地区					周辺住宅地区				合計	
			一般農家・住宅		越屋根付養蚕農家						
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	
1 現状のままが良い	10	24.4	9	27.3	1	12.5	23	37.7	33	32.4	
2 養蚕農家景観を活かした住宅地	16	39.0	13	39.4	3	37.5	22	36.1	38	37.3	
3 大型店の集積した便利なまち	2	4.9	2	6.1	0	0.0	3	4.9	5	4.9	
4 近代的な住宅地	5	12.2	4	12.1	1	12.5	2	3.3	7	6.9	
5 養蚕農家景観を活かした観光地	2	4.9	1	3.0	1	12.5	4	6.6	6	5.9	
6 事務所や商店の集積したまち	1	2.4	1	3.0	0	0.0	1	1.6	2	2.0	
7 先端工業のまち	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
8 豊かな農村	3	7.3	1	3.0	2	25.0	3	4.9	6	5.9	
9 その他	2	4.9	2	6.1	0	0.0	2	3.3	4	3.9	
10 NA・無効	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.6	1	1.0	
回答総数	41	100.0	33	100.0	8	100.0	61	100.0	102	100.0	

(2006年11月－12月 高崎経済大学戸所ゼミ調査)

以上を地区的に見ると、現状肯定派が養蚕農家地区（24%）より周辺住宅地区（38%）に多い。他方で、近代的な住宅地を求める人の割合は、周辺住宅地区（3%）より養蚕農家地区（12%）で多くなっている。養蚕農家地区における越屋根付き農家とそれ以外での差はほとんど無いが、越屋根付き養蚕農家で近代的住宅を望むところがある。これは伝統的建物居住者が、近代化に憧れる人とこれからも伝統文化を守り、維持発展していこうとする人とに二極分化してくる兆候ともいえる。

4. 大規模養蚕農家群保存に関する住民意識とその方策

1) 養蚕農家地区における建物の築年数と外観改修の有無

養蚕農家地区における建物の築年数は、20年未満22%、20～39年27%、40～59年24%とコンスタントに新陳代謝が進んでいるといえる。しかし他の地域に比べ、相対的に新しい建物が少ない。他方で、第二次世界大戦前に建てた築年数60年以上の建物が全体の24%も存在し、その3分の2が100年以上の築年数を持つ古い立派な建物である（表5）。

養蚕農家地区の「越屋根付き大規模養蚕農家」8戸の築年数は、かなり古い。すなわち、築年数100年以上が3棟、80～99年が3棟で、残りの2棟も40～59年である。「その他の建物」の場合、61%が40年未満の築年数であり、越屋根付き大規模養蚕農家との差は歴然としている。しかし、養蚕農家地区では「越屋根付き大規模養蚕農家」以外でも、築年数40年以上の建物が12棟あり、そのうち3棟は100年以上である。このように養蚕農家地区では、地区全体に大規模でかつ伝統的農家の建築物が数多く存在する（写真7）。

現在、中核都市の中心市街地に隣接した伝統的農村集落は、急速に近代的な建築物に建て替えられつつある。前橋市およびその近郊もその例外でない。その中にあって、山王地区における養蚕農家地区ではそうした状況にない。「越屋根」の有無に係わらず、かつての養蚕農家（回答41戸の内34戸）に対して、建物の新築・改修予定を尋ねた。その結果は、現状維持が73%、内装を変え外装を維持が21%である。すなわち、94%が外観的には現状維持を指向している。また、新築する場合も和風を選択しており、景観的には現状が維持できる状況にある（表6）。ただし、和風といって

表5 養蚕農家地区における建物の築年数（単数回答）

回答項目	一般農家・住宅		越屋根付養蚕農家		合計	
	人	%	人	%	人	%
1 20年未満	9	27.3	0	0.0	9	22.0
2 20～39年	11	33.3	0	0.0	11	26.8
3 40～59年	8	24.2	2	25.0	10	24.4
4 60～79年	1	3.0	0	0.0	1	2.4
5 80～99年	0	0.0	3	37.5	3	7.3
6 100年以上	3	9.1	3	37.5	6	14.6
7 NA・無効	1	3.0	0	0.0	1	2.4
回答総数	33	100.0	8	100.0	41	100.0

(2006年11月～12月 高崎経済大学戸所ゼミ調査)



写真7 越屋根のない大型養蚕農家建物

も養蚕農家とは異なる京風建築や数寄屋様式の建物となるため、農村景観との違和感は否めない。

いずれにせよ、他地域に比べて、一定の規範の範囲内で建築行動をしようとする地域住民の意向は、どのような要因から出てくるものであろうか。それに関しては次のことが考えられる。その第一は、

古くより経済的に豊かな地域故に、良質な資材を使用した堅固な建築物が多いことである。第二に、伝統的景観とその生活様式を維持することを良しとする地域コミュニティの存在がある。また第三に、大規模農家が多く、歴代の当主が今日まで農業を継いできている。その結果、自らの生活する地域の過去・現在・未来を語り、地域を良くしていこうと自己実現を図る町衆たる人材が存在することである。これは京町家における維持保全やコミュニティの持続的発展要因に似たものといえよう。

こうした要因がうまく機能してきたため、山王地区では自力で良好な農村景観を今日まで維持できたといえる。そうした考えはアンケート結果（表6）で知られるように、これから維持されようとしている。しかし、これからはこれまでのようには進まないであろう。情報社会の進展と少子化の中で、持続的に後継者が存在するとは限らない。また、人口減少社会とはいえ、前橋と高崎の中心市街地に挟まれた地区故に都市化の圧力は強まってこよう。さらに、急速に人々の考え方が変化しつつあり、生活様式もコミュニティの変化も著しい。こうした中で、伝統的な文化的景観を維持保全することは相当な努力と経費を必要とすることになる。

2) 国の文化的景観地区・伝統的建造物群保存地区指定等に対する意識

良好な状態でコンパクトにまとまって存在する山王地区の大規模養蚕農家群とその周辺環境は、この地域の伝統的な文化・産業景観を表象している。そして山王地区の大規模養蚕農家群は、すでに伝統的建造物群保存地区の指定を受けた群馬県吾妻郡六合村の赤岩地区や様々な形でマスコミに取り上げられる伊勢崎市境町島村地区のそれに決して劣っていない。むしろ優れているといえよう。それだけに、当該住民が国の文化的景観地区や伝統的建造物群保存地区への指定を望み、地域住民の賛同が得られ、研究者や行政がそれを支援するなど、官民が一体となって指定を求めれば、指定の可能性が高い地区である。そこで、養蚕農家地区において、指定希望の有無を尋ねた。

その結果、養蚕農家地区の回答者41人の20%が指定を望んでいる。また回答者の24%が、条件付きで指定を希望する。この両者を合わせると指定希望は44%となる。他方で、指定を望まない人は15%で、希望者の3分の1に過ぎない。むしろ現在のところ、どうするべきか「分からない」人が39%と多い状態である。既述のように、この地域はこれから大きく変貌するであろう環境にある。それだけに「分からない」という人を減らすために、将来のあるべき地域の姿を住民が十分に検討し、早急に地域資源を活かした地域づくりの方向を示し、協調してある

表6 養蚕農家地区における農家の外観維持の予定（単数回答）

回答項目	一般農家・住宅		越屋根付養蚕農家		合計	
	人	%	人	%	人	%
1 現状で維持	22	84.6	3	37.5	25	73.5
2 内装を変えて維持	3	11.5	4	50.0	7	20.6
3 和風に新築	1	3.8	1	12.5	2	5.9
4 洋風に新築	0	0.0	0	0.0	0	0.0
5 その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0
回答総数	26	100.0	8	100.0	34	100.0

(2006年11月－12月 高崎経済大学戸所ゼミ調査)

べき姿の実現に努力する必要がある (表7)。

次に、以上の結果を「越屋根付き大規模養蚕農家」と「その他の建物」居住者で見比べてみよう。指定物件となる「越屋根付き大規模養蚕農家(8棟)」の居住者は、国の指定を希望する3,望まない3,分からない2に三分された。現在の景観を維持するには、何らかの形で行政の支援が必要になり、指定は不可欠と考えざるを得ない。しかし、指定を受ければ何らかの形で自由が制限されるので、指定を希望しない人が出るのも自然である。この場合、経済的余裕があり伝統的な文化・産業景観の維持保全に理解のある所有者は自力で維持保全を行うとする。だが、経済的余裕がない場合や伝統的な文化・産業景観に関心のない所有者の場合、公的支援がない限り、地域に根ざした伝統的な文化・産業景観といえ、近い将来自然消滅していくことになりかねない (写真8)。

アンケートの回答が得られた「越屋根付き大規模養蚕農家」8戸のうち1戸は、山王地区の将来像として近代的な住宅地を望み、自宅の文化財指定を望んでいない。また、和風であるものの都市型の建物への新築を望んでいる。世代交代の中でこうした考えが増加してくることは容易に予測できる。それだけに、地域の人々の意思疎通を図りながら、貴重な地域資源としての伝統的文化・産業景観の維持保全方針を早急に決める必要がある。

3) 国の文化的景観地区・伝統的建物群保存地区等の指定を受けた際の対応

何らかの形で大規模養蚕農家群が国の保存指定を受けた際、どのような対応や協力の意向を持つかを複数回答で尋ねた。回答で最も多かったのは、「文化財保護への協力」の34%である。次いで、27%の回答者が「町並み整備に協力」をあげ、回答者の25%が「家屋改築時に周囲の景観に合わせる」と答えている (表8)。

以上は目に見える公共的な景観整備やその保全が中心で、「家屋改築時に周囲の景観に合わせる」にしても非日常的な対応関係である。その中で、日常的な対応形態である「訪問者への協力」を回答者の20%が答えているのが目立つ。しかし、文化財指定の建物見学や地域全体の環境整備、長野県小布施町で成功したオープンガーデンなどで交流人口を増やす「自宅や庭を整備し訪問者に開放」は6%と少ない。また、「見学者相手の商売」などを興し、新しい時代や環境変化に対応しようとする人はゼロである。

表7 国の文化的景観・伝統的建築物保存地区指定への希望 (単数回答)

回答項目	一般農家・住宅		越屋根付養蚕農家		合計	
	人	%	人	%	人	%
1 指定を望む	7	21.2	1	12.5	8	19.5
2 条件付きで指定を望む	8	24.2	2	25.0	10	24.4
3 分からない	14	42.4	2	25.0	16	39.0
4 望まない	3	9.1	3	37.5	6	14.6
5 その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0
6 NA・無効	1	3.0	0	0.0	1	2.4
回答総数	33	100.0	8	100.0	41	100.0

(2006年11月-12月 高崎経済大学戸所ゼミ調査)



写真8 06年4月撮影のこの養蚕農家建物も07年9月に消滅

表8 国の文化的景観地区等に指定された際の対応（複数回答）

回答項目	養蚕農家地区						周辺住宅地区		合計	
			一般農家・住宅		越屋根付養蚕農家					
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1 改築時に周囲の景観に合わせる	10	24.4	9	27.3	1	12.5	15	24.6	25	24.5
2 他地域への情報発信	2	4.9	2	6.1	0	0.0	11	18.0	13	12.7
3 文化財保護に協力	18	43.9	15	45.5	3	37.5	17	27.9	35	34.3
4 訪問者への協力	8	19.5	6	18.2	2	25.0	12	19.7	20	19.6
5 自宅や庭を整備し訪問者に開放	4	9.8	2	6.1	2	25.0	3	4.9	7	6.9
6 町並み整備に協力	7	17.1	4	12.1	3	37.5	20	32.8	27	26.5
7 見学者相手の商売	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
8 何もしない	5	12.2	4	12.1	1	12.5	9	14.8	14	13.7
9 その他	1	2.4	1	3.0	0	0.0	1	1.6	2	2.0
10 NA・無効	2	4.9	2	6.1	0	0.0	2	3.3	4	3.9
回答総数	57	139.0	45	136.4	12	150.0	90	147.5	147	144.1
回答者数	41	100.0	33	100.0	8	100.0	61	100.0	102	100.0

(2006年11月－12月 高崎経済大学戸所ゼミ調査)

地区別に見ると、養蚕農家地区で「文化財保護への協力」が44%と周辺住宅地区の28%に比べ多い。これは身近な文化景観を皆で守っていこうというコミュニティの結束の現れともいえる。他方、「町並み整備に協力」は周辺住宅地区が33%であるのに対して、養蚕農家地区は17%と約半分である。周辺住宅地区に比べ養蚕農家地区は伝統的な町並みが既に整っているため、新たな町並み整備の必要性を感じていないためであろう。

養蚕農家地区の「越屋根付き大規模養蚕農家」では「文化財保護への協力」、「町並み整備に協力」、「訪問者への協力」、「自宅や庭を整備し訪問者に開放」が選択されている。これらは伝統的文化・産業景観の維持保全当事者として必要なことであり、既にそれを保持していることが知られる（写真9）。



写真9 越屋根にも様々な様式がある

5. 文化的景観の活用による地域活性化政策

1) 富岡製糸場の世界遺産登録への動きと蚕糸業景観としての山王地区

山王地区の大規模養蚕農家群は、産業革命に始まる明治以降の工業化社会の構築を、蚕糸業を柱に先導してきた群馬県の礎のひとつである。すなわち、蚕糸業は農家が蚕種を購入し、桑を育て、養蚕によって繭を生産する。繭は農家から製糸業者に売られ、工場で生糸となり、それらは織物工場で絹織物製品になる。群馬県は原料の繭生産から絹織物製品までの全行程を一貫して行う体制が出来ていた。その行程を近代化するために先導したシンボルが、明治5年開設の官営富岡製糸場である。

日本の産業革命を促し、工業社会への転換を進めた富岡製糸場の威容が、今日もなお創建当時のままに存在する。そのため、富岡製糸場は2006年にユネスコの世界遺産に暫定登録された。富岡製糸場を世界遺産の本登録へと導くには、富岡製糸場とその周辺だけの整備では難しい。それに加えて、富岡製糸場を核にした広域における蚕糸関連施設のネットワークが必要となる。すなわち、官営富岡製糸場の技術伝播による民間製糸場の隆盛を忍ぶ景観が求められる。また、桐生の絹織物工場群なども欠かせない。さらに、桑畑と養蚕農家群からなる原料生産景観が不可欠となる。山王地区の大規模養蚕農家群は、まさにその一翼を担うに相応しい歴史と伝統的な文化・産業景観を持つ。

ユネスコの世界遺産にしても、日本の文化的景観地区の指定にあたっては、それらが多くの人々に人類の生き様を伝え、様々な環境の中で気高く生き抜く力と感動を与えるものでなければならぬ。それは新しい時代、知識情報社会を構築するための糧になるものであり、知識情報社会の構築に不可欠な人材を養成・吸引するための地域づくりでもある。

かかる視点から次に、山王地区を取り巻く総社町や隣接の前橋市元総社地区や高崎市国府地区との連携やその整備方向について考えてみたい。

2) 住民の求める山王地区およびその周辺地区の環境整備

山王地区の大規模養蚕農家群は、今日、世界に冠たる日本の工業化の原点となった蚕糸業の基本的文化景観である。これをクローズアップさせるために、地域住民はどのような環境整備を望んでいるのであろうか。それに対する最も多い要望（山王地区全体回答者の35%）は、2年前に拡充移転した総社小学校跡を文化拠点として再整備することである（表9）。

総社小学校跡は山王地区の大規模養蚕農家群から約1km東北の総社町中心部に位置し、国史跡の宝塔山古墳・蛇穴山古墳、それに秋元家菩提寺の光巖寺や五千石用水に囲まれた歴史文化地区である。現在、この小学校跡地と隣接地の閉鎖された総社幼稚園跡が未利用地となっている。他方で、その隣接地には前橋市の総社歴史資料館が、民間の旧酒造蔵を借用して地域住民の手で運営される。また、総社公民館は前橋市内の他の地区公民館に比べ機能的に弱く、規模も小さく、最も老朽化している公民館のひとつである。

そこで筆者は、これまでこの跡地を利活用するべく、総社町およびその周辺地域一帯に所蔵される文化財を収集・保管・展示すると共に、文化財研究や都市観光の拠点、総合的な地域文化交流センターとしての「総社地理歴史博物館」を提唱してきた⁵⁾。地域の貴重な文化的景観を

表9 山王地区・総社町における整備・改善点（複数回答）

回答項目	養蚕農家地区						周辺住宅地区		合計	
			一般農家・住宅		越屋根付養蚕農家					
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1 防風林・養蚕農家の維持整備	10	24.4	6	18.2	4	50.0	11	18.0	21	20.6
2 道路の整備・拡張	14	34.1	12	36.4	2	25.0	16	26.2	30	29.4
3 公共交通の利便性	12	29.3	9	27.3	3	37.5	12	19.7	24	23.5
4 市民サービスセンター	3	7.3	3	9.1	0	0.0	7	11.5	10	9.8
5 総社小学校跡に文化施設	17	41.5	15	45.5	2	25.0	19	31.1	36	35.3
6 養蚕資料館の創設	2	4.9	1	3.0	1	12.5	3	4.9	5	4.9
7 公園などの公共空間整備	9	22.0	6	18.2	3	37.5	9	14.8	18	17.6
8 街灯の整備	8	19.5	6	18.2	2	25.0	14	23.0	22	21.6
9 上越線に新駅設置	2	4.9	2	6.1	0	0.0	6	9.8	8	7.8
10 安心安全のまちづくり	12	29.3	9	27.3	3	37.5	17	27.9	29	28.4
11 生涯学習施設の充実	4	9.8	3	9.1	1	12.5	5	8.2	9	8.8
12 産業振興	2	4.9	1	3.0	1	12.5	4	6.6	6	5.9
13 地域内交流のイベント開催	0	0.0	0	0.0	0	0.0	7	11.5	7	6.9
14 土地利用・景観規制	1	2.4	1	3.0	0	0.0	6	9.8	7	6.9
15 地域ブランドの創出	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
16 電線の地中化	8	19.5	7	21.2	1	12.5	6	9.8	14	13.7
17 周辺地域との交流と連携	2	4.9	1	3.0	1	12.5	6	9.8	8	7.8
18 駐車場の整備	1	2.4	1	3.0	0	0.0	0	0.0	1	1.0
19 その他	5	12.2	4	12.1	1	12.5	7	11.5	12	11.8
20 NA・無効	3	7.3	3	9.1	0	0.0	2	3.3	5	4.9
回答総数	115	280.5	90	272.7	25	312.5	157	257.4	272	266.7
回答者数	41	100.0	33	100.0	8	100.0	61	100.0	102	100.0

(2006年11月－12月 高崎経済大学戸所ゼミ調査)

活かすために、山王地域にはそうした総合的な地域文化交流センターの必要性を感じている住民の多いことが知られる。なお、小学校跡地における文化拠点整備の要望も、養蚕農家地区は42%、周辺住宅地区は31%と町衆による伝統的な地域形成を実践してきた養蚕農家地区で高い。

他に多く回答のあった環境整備は、「道路の整備・拡張」29%、「安心安全のまちづくり」28%、「公共交通の利便性」24%、「街灯の整備」22%、「防風林・家屋の維持整備」21%、「公園など公共空間整備」18%、「電線の地中化」14%である。このように、全体として道路や公園などのハード面の環境整備に重点が置かれている。しかし、そうしたハード事業もソフト面を加味した公共交通の利便性の向上や安心安全のまちづくりの視点から発せられていると考えられる。

地域的にみると、養蚕農家地区の人々は「防風林・養蚕農家の維持整備」、「公園など公共空間整備」、「電線の地中化」、「公共交通の利便性」など景観や交流に関するものを多く要望している。また、要望事項もそれらへの収斂性がみられる。他方で、周辺住宅地区住民は「地域内交流のイベント開催」など日常生活関連事項に関心を示し、養蚕農家地区住民より要望事項に分散性がある。こうした相違は、地域のコミュニティ形成の違いや文化的景観の維持保全に関する意識差に関係しているといえる。

3) 地域資源としての文化的景観を活かした地域活性化方策

山王地区の大規模養蚕農家群は、見応えのあるすばらしいものである。しかし、そのすばらしさを五官で感じるには、現場に立つ以外ない。多くの人々がそれを経験するには、そのための条件整備が必要となる。それは都市形成の本質に繋がるものでもある。その必要条件には以下のものがある。

すなわち、①当該地域への接近性（アクセス条件）を良くする。②大規模養蚕農家群およびその関連施設や諸環境との結節性を高める。また、③大規模養蚕農家群の核心地区と周辺地区のメリハリをつけ、分かりやすく地域に構造化しなければならない。さらに、④基本的な文化的景観を維持しつつ、常に時代の変化に対応して様々な側面において地域の新陳代謝を図る必要がある。また、山王地区における様々な人・物・情報の交流の結果として、創造性豊かな魅力ある地域社会の創成が求められる。そのためには、地域の持続的発展を保証すべく、新たなビジター産業の創造が必要となる。

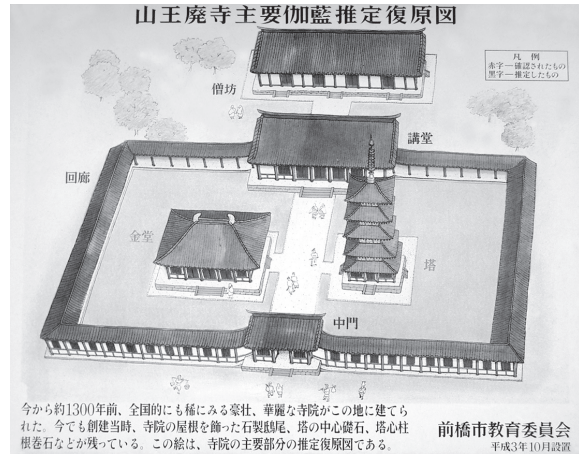


写真10 山王廃寺跡に揭示された復原図

こうした視点から山王地区の現状や住民意識を見た時、いくつかの課題が見いだせる。接近性においては、公共交通系と個人交通系から考える必要がある。文化的景観を核としたまちづくりの場合、歩いて地域を知る必要がある。歩かねば文化的景観は認知できない。そのため、基本的に公共交通を中心に、当該地域へのアクセス条件を高めねばならない。特に都市部の場合、駐車スペースに多額の費用を必要とするため、公共交通の整備が重要となる。また、山王地区の場合、後述するように、近隣の様々な文化財や名所旧跡巡りが歩いてできる地域である。それには起終点が異なるため、公共交通の方が便利でもある。

既述のように、地域住民も公共交通の利便性向上を求めている。しかし、上越線新駅設置の要望は少ない(表9)。山王地区や総社町の歴史文化財や文化的景観は、かなり広域から人々を吸引できる価値をもつ(写真10)。それだけに広域ネットワークを持つ鉄道によるアクセス性の向上は欠かせない。既存のJR群馬総社・新前橋駅の中間に「(仮称)前橋西駅」を設置すれば、山王地区周辺住宅地区まで約500mである。前橋西駅を出発点として、山王地区や総社町全域の史跡群を巡検して群馬総社駅を終点とすることも出来る。こうした視点から今後検討する必要がある。

結節性に関しては、現状では山王地区に結節性を高める施設も機能もない。可能ならば大型養蚕農家を一般開放し、そこへ養蚕資料館を併設することが望ましい。そこで多くの人々が交流することにより、山王地区の人々にもビジターにも知的刺激がもたらされ、新たな創造へと結びつく環境整備となる。しかし、アンケートの回答でも「養蚕資料館の創設」要望は少ない。

また現実問題として、生活空間を一般公開することには躊躇するであろう。そのため、交流空間の確保には、山王集落の北約300mに立地する群馬県蚕業試験場との連携や、小学校跡地における総合的な地域文化交流センターの創設がより一層重要を増すことになる。

大規模養蚕農家群の核心地区と周辺地区の構造化は、大規模養蚕農家群を国の文化景観地区や伝統的建造物群保存地区に指定することで進展するであろう。その際の留意点は、指定地区、バッファゾーン（緩衝地帯）、周辺地域へと構造化させると共に、関連文化財を一体的に整備することである。

問題は時代の変化に対応して、地域の新陳代謝を如何に図るかである。大規模養蚕農家群の文化的景観を維持保全しつつ地域の持続的発展を図るには、国の地域指定を受けると共に、それに対応した独自の地域経済システムの構築が不可欠となる。それには土地利用・景観規制、人材養成に資する生涯学習施設や新たな産業振興、地域ブランドの創出が必要である。しかし、アンケート結果を見る限り、以上の事柄への関心は低い。以上の事柄への関心を高め、地域資源を活かした地域ブランドを確立し、地域の魅力を高めることで後継者やビジターを吸引し続けられない限り、地域の持続的発展は望めない。

山王地区の文化的景観を活かす方策として、大規模養蚕農家群の核にして総社町およびその周辺をエリアとする歴史文化景観回廊の設置が考えられる。山王地区の南西1kmには上野国国分寺跡があり、発掘や復原が進んでいる。また、山王地区の南約1.5kmには上野国の国府想定地と総社神社が鎮座する。さらに、山王地区から北西には約1.5kmの範囲に連続して五千石用水・天狗岩用水、光巖寺、総社古墳群、総社城趾、総社歴史資料館など多くの文化財や施設がある（図1）。これらと山王地区の大規模養蚕農家群を一体化することで、歩いて一日が楽しめる多彩な歴史文化景観の回遊ルートが構築できる。近距離にこれだけ多彩な文化財や文化景観があるところは全国的にも珍しい。山王地区はこの歴史文化景観の回遊ルートを整備しつつ、ビジター産業の振興を図れる地域といえる。

6. 終わりに

山王地区には明治から昭和前期までの日本経済を支えた蚕糸業の産業遺産の一つである防風林を持つ大型養蚕農家群がある。この文化景観を維持保全しようとする住民の意識は極めて高いことが分かった。また、身近な文化景観を皆で守っていこうというコミュニティの結束もある。他方で、防風林を持つ大型養蚕農家群の維持保存には、多大な労力と経済的な負担が伴う。そのため、この貴重な地域資源を今後とも持続的に維持保存できる保証はない。

ところで、山王地区の文化景観や文化財に誇りを持つ住民はおり、外からの見学者も多い。しかし、日常的に暮らす地域の価値を十分に認識する人はまだ少ない。山王地区の大規模養蚕農家群は地域の人にとっては日常であるが、外部の人間にはきわめて質の高い非日常空間となる。このことの理解を深めるには、山王地区の大規模養蚕農家群の価値を十分に認識した外部の人間と地域住民の交流を活発にしなければならない。

他方で、地域資源の価値に目覚めた人も、様々な悩みを抱えている。すなわち、貴重な文化財や文化景観を保存したいが日常生活への影響に抵抗感を持つ。また、文化的景観地区などへ

の指定に対する不安も大きい。しかし、越屋根付き大規模養蚕農家の中には後継者不在の問題もある。また、大規模なパチンコ店が地区内に建設される計画やモダンなデザインの家も出現している。そのため、山王地区のすばらしい文化景観を維持保全するには、それを可能にする手立て・政策を早急に打つ必要がある。

この貴重な地域資源を活用しながら保存するには、次の施策が必要と考える。すなわち、①国の文化的景観地区などの指定を受ける。②近隣の国分寺跡、総社神社、総社古墳群、総社城跡、歴史資料館、県立蚕業試験場などによる歴史文化景観回廊を設置し、その回遊ルートを整備する。③他地域から訪れる交流人口に良い環境のもとでサービスしつつ地域に富をもたらす新しい地域産業を開発する。このビジター産業が地域経済を支え、従来の文化的景観にとけ込む新たな文化的景観を形成することで、経済的な基盤も創られ、地域の持続的発展も図れるであろう。

山王地域には地域の過去・現在・未来を語れ、地域を良くしようと自己実現を図れる町衆が存在する。それらの人たちと行政・研究者等が連携し、地域住民の地域資源への理解を深めるための活動が求められる。同時に外部社会への広報で、外から山王地区の大規模養蚕農家群をはじめとする文化景観・文化財の素晴らしさを認識させる必要がある。それにより、山王地区は新たな地域文化を創造し続ける地域に変身するであろう。

(とどころ たかし・高崎経済大学地域政策学部教授)

〔注〕

- 1) 総社町誌編纂委員会：『総社町誌』前橋市総社出張所，1956
- 2) 読売新聞前橋支局編：『絹の再発見』喚乎堂，pp.302，1964
- 3) 戸所 隆：前橋市総社地区の近代こけし，地理27-9，110-117頁，1982
- 4) 2006年11月現地踏査により算出
- 5) 戸所 隆：大都市化・分都市化時代における『総合計画』策定のあり方—前橋市総社地区を例に—，地域政策研究8-2，187-197頁，2005
- 6) 戸所 隆：公共交通中心のまちづくりと鉄道駅新設に関する地域の反応，地域政策研究8-3，71-87頁，2006

〔付記〕

本稿の作成に際し、現地調査・アンケート等でご協力頂いた前橋市総社町山王地区の住民の方たちに厚く御礼申し上げます。また、アンケート調査等には高崎経済大学地域政策学部都市地理学・都市政策研究室の大学院生稲垣昌茂と学部3年生の秋山卓也・長谷川知哉・猪俣順子・遠藤公師朗・加野智音・小林政善・佐々木絵里・澤里神奈・市東奈緒・信澤祐介・堀越隆彦・間宮直樹の各氏が参加した。なお、写真はすべて筆者の撮影である。